立命館大学産業社会学部リユニオン会報

校友さんしや

2003年12月10日　No.30
題字●元総長・細野武男氏

40周年　産業社会学部は40周年を迎えます。

2004年、産業社会学部は創立40周年を迎えます。40周年記念行事を次のとおり企画していますので、OB、OGのみなさまのご協力・ご参加を賜りますようお願い申し上げます。

企画の詳細は、2004年3月立ち上げ予定のリユニオンホームページで随時お知らせしていく予定です。

1. 40周年記念式典
   2004年12月4日(土)開催！
2. 学術企画
3. 40周年記念誌の発行
4. その他企画　現在検討中。

産社校友会（リユニオン）の改革に向けて

リユニオン会長　都鳥　正喜

まず最初に、この間活動が中断し、十分な役割を果たせずにきましたことを、この場をお借りして深くお詫びいたします。

振り返りますと、本会は、一九八四年産業社会学部二十周年を機して設立されたOB会です。全学校友会は府県を単位として支部を組織しており、学部を単位とする校友組織は産社が初めてのことでありました。そのため当初は、学部校友会は全学校友会の中では、職域で結成されているグループと同様の位置づけとされ、「校友会」という名称を使うことを差し控え、産社校友会は「産社リユニオン」として活動を続けてまいりました。

その後、国際関係学部や経済学部で学部校友会が結成され、政策科学部や法学部、経営学部でもあいついで学部校友会が結成されるに及び、全学校友会においても認知されることとなってまいりました。

こうして見ると、産社の学部校友会の結成が、立命館における学部校友会の結成をリードしたという歴史的評価を得ることになると言えますが、現実の運営では大きな課題を残しております。特に、結成以来二十年を経過する中で、期生幹事が転居や異動により空白を生み出してきております。また、日常的活動も学部事務室まかせになってしまい、主体的活動が出来ない状況になりました。

これらの問題を解決するためには、この二十年間の活動を振り返り、何が出来て、何が出来なかったのかという総括を通じ、全学校友会、学部、そして校友という関係の中で私たちの役割を位置づけ、その課題に則して必要な手立てをとっていく抜本的改革が必要であると考えます。中断した活動を再開していくため、今一度その存在を問いかけ、学部創立四十周年に向け、努力をしていくことをお約束し、ご挨拶といたします。

産業社会　学部の今

学部創設四十周年にむけて 社会に開かれた産業社会学部へ新たな飛躍を

産業社会学部長・社会学研究科長　佐藤　春吉

今春から産業社会学部長・社会学研究科長に就任いたしました。どうかよろしくお願いします。一九九二年に、当時の「社会学概論」担当教員として赴任しました。

本学部は、二〇〇一年の改革によって産業社会学科と人間福祉学科の二学科制のもとで、現在は、学部全体で約四、〇〇〇名、大学院在学者総数一五〇名以上に達する規模に発展し、教員数も七〇余名を擁し、入試難易度も上がり社会的評価も年々高まってきており、多彩な学びを可能とする、全国的にも有数の社会科学系総合型学部として発展を遂げてきています。

学部の重点課題は、教育と研究の質をいっそう向上させること、これこそが基本であります。なかでも本年度は、国際的な視野と活動能力をもった人材育成をめざした新しい教育研究の仕組みづくりが焦眉の重点となっております。現在、二〇〇五年度のカリキュラム改革をめざして、二つの学科に「国際インスティテュート」という国際的分野で活躍できる人材育成の枠組みを拡充強化し、あわせて英語を中心とする語学教育の新しい仕組みについて議論をすすめているところです。また、社会的ネットワークの強化と発信型の学部づくりも現在の重点課題に位置づけております。この点では、なんといっても校友の皆様との関係強化が大切であると考えています。特に、来年度の学部四十周年記念諸行事の成功をはかりつつ、そこを起点に、校友会の寄付講座という形で学部教育を支えていただく仕組みを立ち上げ、リレー講義形式で、社会的に活躍されている卒業生の方々の姿を現役学生に伝えていただき、励ましを与えられるようにできないか、校友会幹事会にもご提案申し上げ、ご検討いただいているところです。もちろん、この他にマスコミや財団や企業、団体等との多様な提携をいっそう強化し、インターンシップの拡充や学生のキャリア形成などにも有効な枠組みを拡大していきたいと考えています。情報発信の強化については、学部ホームページの充実と校友会ホームページの開設を通じて常時、学部の教育・研究や日常の活動の姿、学生の活動の様子などを発信し、校友会の皆様との恒常的な情報交換の仕組みを形成強化していきたいと考えています。

すでに触れましたように、来年度は学部創設四十周年にあたります。学部では、記念行事等の企画を検討中でございます。本学部卒業生は既に総数二五、〇〇〇名を数えるにいたります。今では、すでに社会のなかで枢要な地位につかれておられる方や、仕事ざかりでさまざまな現場で中核的な役割を担っておられる方々が多数生まれてきております。四十年の年月は確実に本学部の社会的な存在意義を高め、歴史を刻んできております。来年度は、ぜひとも学部の歴史的成果を皆様とともに確認しあい、新世紀における学部の未来の希望を語り合える場にしたいと思っております。どうか、これを契機としつつ、今後とも産業社会学部に厚いご支援とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

社会とのネットワークをもとに、こんな授業が開講されています。

■「讀賣マスコミ講座」（讀賣テレビ放送協定科目）

斎藤喬編集委員を客員教授として招聘し、2001年度より開講。今年度は「21世紀の世界とジャーナリズム」をテーマに、第一線で活躍するジャーナリストが国際報道や犯罪報道の実情、地上波デジタル放送の基礎知識などについてリレー講義を繰り広げました。

■「NHKテレビメディア最前線」（NHK協力講座）

NHKの番組制作担当者、プロデューサー、記者、キャスター等を招いてのリレー講義。「プロジェクトX」、「NHKスペシャル」、「クローズアップ現代」等、個々の番組を取り上げながら、日頃それぞれの現場で何を考え追い求めているのか、その理念と現実が語られました。
この授業は大学コンソーシアム京都の単位互換制度により、他大学生も受講しています。

■「京都市行政論」（京都市との協力講座）

この授業では、京都市における自治体行政実務の最戦前を学生たちに紹介。総務局、都市計画局、教育委員会など、現場で指揮をとっている各局課長が講師となり、リレー講義が行われました。（大学コンソーシアム単位互換授業として開放）

キャンパスを飛び出し、社会で学ぶ。「インターンシップ」

現在、産業社会学部では、エイベックス・ディストリビューション、岐阜新聞、ジェイディスク、にじっと（長岡京市民活動サポートセンター）、気候ネットワークと協定を結び、学生が企業や自治体などの現場で実務を経験する「インターンシップ」を展開しています。各自の研究を深め、また将来の進路につながる実践的能力を身につける場として年々参加する学生が増加しています。今年度、産業社会学部では全学共通のインターンシップを含めると一〇〇名余りがインターンシップに参加。大学におけるキャリア教育はインターンシップ抜きには考えられない状況となってきています。

一例として「気候ネットワーク」とのインターンシップについて紹介します。

気候ネットワークにおける新しい学び ―インターンシップ制度の利用例―

山口　歩（科学技術史）

インターンシップ制度もかなり大学に定着してきましたが、現今では、気候ネットワーク等のNPO団体において活動する学生もその範疇に組み入れられています。気候ネットワークとは、温暖化防止を目指す市民によって設立されたNPO法人で、一九九八年に京都で開かれた温暖化防止会議の趣旨を受けて発足した組織であります。そもそも環境問題の解決に向けて最も実行力を発揮しているのは、世界的に見ても企業や政府組織に属さない市民でありNPOといえます。（例えばデンマークやドイツにおいて風力発電が大きく普及しえたのも、市民がエネルギー政策にコミットし、また自ら投資し、所有していく過程においてであるわけです）

こうした中で、多くの日本の若者も各種市民運動を手伝い、また自ら創造的な活動を展開しております。実は立命の「インターンシップの利用」と「NPOへの参加」の関係も、後者が先に存在していたもので、こうした学外における活動をインターンシップの名の下に再構成させてもらったというのが正しいいきさつです。

気候ネットワークは、市民（小学生他）への教育啓蒙活動から、実際の調査プロジェクト、社会政策提言にむけての研究会など多彩なメニューをもっていて、また優秀な指導能力も備えています。そこに参加する学生は、研究、調査のノウハウを実践の中で身につけ、また自ら、社会（自然環境）を捉え直す視点を形成していきます。

現今の社会は環境問題的観点で見たとき、大いに疲弊しており、ドラスティックな改革を必要としております。また、問題解決に向けては、多くの伝統的学問領域を超えて、あるいは総合して思考することが必要とも言われております。要するに、旧来型の知的枠組みを踏襲する（教育）制度の中では、こうした問題を解決する人材を育成することは大変困難なことなのです。今回紹介しました気候ネットワークなどの組織における活動（学習）は、こうした困難性を打破する一つの方策です。学生は、リアルに社会を見る目を獲得し、またなにより実践の中で学習の意欲を倍加させて帰ってきます。今後も、こうした組織とのインターンシップの提携が進められることを強く希望する所以です。

立命館大学産業社会学部リユニオン会報
発行人●都烏正喜
発行所●産業社会学部リユニオン
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
☎(075)465-1111㈹ 振替 京都3-19595

校友さんしや

2003年12月10日 第30号

Sansha賛謝

松田 博（社会思想）

本学に赴任して二一年になる。学部のダイナミックな発展を身をもって体験してきた。なかでも大きな刺激とエネルギーを与えてくれたのは、学部、大学院のゼミ。学部ゼミは、第一期（八六年卒）から在外研究期間以外はほぼ毎年担当し、現在は、一六期生（四回生）、一七期生（三回生）を担当している。毎年各ゼミ毎にやっていたゼミ会を、卒業生の発案で合同ゼミ総会兼OB・OG交流会として開催するようになって早くも一二年目になる。今年は一二月六日開催予定の一二回目の合同ゼミ総会を、三回生が中心になって準備している。

ゼミ会会長のA君（一期生）は、中学教師で、自ら進んで困難校といわれる学校に赴任し、生徒や父母と日々格闘している熱血教師。副会長のS君は、二期生で、家業を継ぎ、中小企業の社長として日々奮闘している。彼も、地元の「問題児」といわれる少年をパートで雇うなど、〝熱い〟人間である。二人ともいつも後輩ゼミ生に言う言葉は「社会学は役に立つぞ、今のうちにしっかり勉強しとけ！」。

研究者やジャーナリストとして国内外で調査や取材に飛び回っているOB・OGたち。企業のなかで総合職や専門職としてがんばっているOGたち。なかには難関の社会保険労務士に合格したOGやJALのCAとして世界の空を飛び回っているOGもいる。OB・OGたちはゼミと社会とのパイプ役であり、私の貴重な「情報源」でもある。来秋は、一八期ゼミがスタートする。私の産社でのラスト・ゼミ。一八期生とともに〝ラスト・ラン〟を大いに楽しみたい。わが教師人生に悔いなし。

◆2002年10月から2003年9月までの間に退職された先生◆（敬称略）

佐藤嘉一（人間論）
武田春子（言語コミュニケーション論）

◆2002年10月から2003年9月までの間に着任された先生◆（敬称略）

吉田信介（英語）
坂本利子（英語）
松田亮三（地域保健論）

◆2002年10月から2003年9月までの間に亡くなられた先生◆

遠藤 晃先生
古川勝弘先生
松尾博文先生

ゼミ同窓会の開催を補助します！

下記の内容で補助を行います。
詳細は事務局までお問い合わせください。

1．**補助金額**
参加者1名につき、2,000円。
ただし、1ゼミにつき上限5万円。（年1回のみ）

2．**申請方法**
①事前に申請用紙を事務室に提出してください。
②開催後、下記の提出物を添えて請求してください。
・案内状のコピー
・領収書および振込口座連絡書
・開催報告書および開催の様子を写した写真
・参加者名簿

「社会福祉士課程」に続き、「精神保健福祉士課程」を設置。

人間福祉学科では、精神医療施設や精神保健センター等で社会復帰支援の仕事に従事する「精神保健福祉士」国家試験受験資格を取得するための課程を、2003年度より設置しました。この課程は定員制を設けており、授業は15人程度のゼミナール形式。現役の精神保健福祉士やカウンセラーによる現場経験を踏まえた実践的指導を受けることができます。